Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

054

地域子育て支援センターの実践から保育所保育の充実へ
ー子育て支援センターの実践からとらえ直す保育所保育ー

○中山美知子（鉄道弘済会旭川保育所・旭川市地域子育て支援センターおひさま）
太田　光洋（九州女子短期大学）

1．はじめに

旭川市において、保育所併設型の地域子育て支援センター事業を開始して７年が経過する。保育所の機能や保育の経験を活かして、電話子育て相談、子育てサロン、育児サークル支援、子育て講座、子育てニュースの発行、ボランティアの育成などの活動を計画し実践してきた。現代の親が抱えるさまざまな子育て困難への共感を出発点とした、これら地域子育て支援センターの活動は、、保育所保育を活性化し、保育所での親理解および親との関わりへの変化を生み、保育への多くの効果をもたらしてきた。これは障害児保育が、障害児だけでなく健常児や保育者を成長させ、保育そのものを豊かにしていくことに通じるものがある。

筆者らはこの間、北海道内での地域子育て支援センターと関わり、情報交換をしながら活動を進めてきたが、同じような経験が伝えられている。

全ての保育所に、地域の子育て支援が求められている現在、子育て支援センターでの実践から保育をとらえ直していくことが、これからの保育所の有り様を示唆しているように思われる。

2．それぞれの子育てが抱える問題と援助のあり方

地域における子育て支援活動では、孤立しがちな子育てを個人の問題とせずに“支え合って子育て”が出来るように、親同士の出会いの場づくりとともに、“親がわが子にしっかり向き合い”子育てが楽しいと感じられる、真に親を子育ての主人公とするサポートを大切にしてきた。家庭で子育てする多くの親たちは、２４時間子どものそばから離れられない拘束感からストレスを抱えたり、長い時間いっしょにいるため、子どもの些細なことまで気になり、子育ての悩みが増大することがある。このため、子育て支援センターでは、託児付きの子育て講座を実施し、親が子どもと離れてゆっくり子育てについて学んだり、ほっとできる時間をつくり親たちから好評を得ている。

一方、保育所では、子ども達の保育時間が年々長くなり、親子で過ごす時間が短くなっている。ゆとりのない生活は、大人中心の生活ペースに子どもを巻きこみ、子どもの話を聞いたり気持ちをくみ取ったりする事が難しくなる。最近は親子関係不全の家庭への援助のあり方が課題になっている。親への愛着欲求が満たされず情緒不安定な子や、気になる行動が目立つ子もいる。加えて保育への要求は強いが育児力の育ちが弱い親などに、保育所側でどのように親を理解し受けとめて、信頼し合える「子育てのパートナー」となっていくか、それぞれの問題に応じた深いところでの家庭援助が必要になってきている。

以上、それぞれの子育てが抱えている課題があるが、現代の子育て困難への共感から出発した子育て支援センターの実践は、これまでの保育所保育にいくつかの影響や、見直していくヒントを与えていると考えられる。

3．方法

支援を行うことによる保育所保育の変化は、保育者の意識と密接に関連するものと推測される。そのため、子育て支援の保育所保育への影響について担当者の連絡協議会に代表される研修会などでの担当者の話し合いとあわせて、本研究者らが行った質問紙調査、聞き取り調査を手がかりとして、保育所保育の変化について検討した。

4．子育て支援に取り組んだことによる保育所保育の変化

①親やその子育て状況の理解と共感

保育現場では、保育や子育てをするうえで、保育所と家庭の連携を車の両輪に例えるなど、その協力関係がいかに大切であるか、かなり以前から主張してきた。しかし、それは往々にして保育所の考えややり方に、親の方が理解を示し歩み寄ってもらえることが前提になっていたように思う。

親の置かれている立場や心情を優先する子育て支援の経験から、保育所の親たちが仕事と子育ての両立に奮闘する姿を、温かく見守り応援していくことこそ、お互いの信頼関係を築いていく第一歩であり、

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

保育所側が親に寄り添っていく大切さを実感した。

さらに、親が慌ただしい生活の中で、例え僅かでも子どもと関わり、親子で共有する時間を大切にする姿を認め、親に子育てへの自信を持たせていくよう心がけた。地域のつながりが希薄な現代こそ、保育所が親にとって頼ったり安心して相談が出来る場であると感じられるようになった。

こうした意識の変化こそ、親に対する保育者のまなざしをやさしくし、保育所保育を変える原動力になっていると思われる。

②保育の公開性

子育て支援を始めて、地域の親子や外部の人が入ってくることが多くなった。開始当時は、そのことの負担とストレスが職員達を悩ませたが、徐々に慣れてきて普段の保育の様子、例えば排泄や食事、着脱への援助、子ども同士のけんかの仲裁などの場面を見た地域の親たちが、そこで子育て技術や子どもとの関わりを学んでいく事実に、かえって保育者としての自信を獲得していった。

他の支援センター担当者の声でもあるが、保育を外部の人に見られている緊張感は、自分の保育を客観的にみる能力を向上させ、保育を特別のことでなく当たり前のこととして考えられるようになってきた。

③親との具体的かかわり

子育て支援での電話相談や来所相談での経験は、特に保育者の意識や親受容能力を向上させていき、保育への変化をもたらした。相談の基本姿勢である傾聴と受容的態度は、相談する親を安心させ、子育てに関する些細なことから心の葛藤までも話してもらうことができた。初めて相談を受けたときは、どんな相談が寄せられるか、うまく応えられるか不安が大きかったが、それぞれの相談に丁寧に関わる中で、話しやすい雰囲気や声のトーン、ニュアンスが相手に与える影響などについても考えられるようになった。当初、所長・主任・担当者しか対応できなかった電話相談も、現在はほとんどの保育者が受けられるようになってきた。

保育者の相談能力の向上は、親との懇談会でも発揮され、子育てサロンや子育てトーク＆トークの経験は、場の設定をリラックスでき、話しやすい環境の懇談会に変化させた。いつもの保育室の姿ではなく、テーブルクロスを掛けた座りテーブルにお花を飾り、茶菓子を用意し和やかな雰囲気のなかで、保育所側からの話はなるべく手短にして、親の声が沢山聞けるよう心がけ、親同士の交流を大切にした。こうして下さい、ああして下さいの指導ではなく、話し合いで親自身が気づいていくこと、ヒントを得て試してみることが、親の自尊感情を高めるとともに、他の誰でもない自分で決定していく自信がその後の、支えになっているとと感じられる。

参観日も参加型にして、親子ふれ合い遊びやゲームなどの具体的遊びを紹介し、親子が笑顔で遊び関わる場の設定にして、親子関係支援として取り組むようになった。

④他機関との連携

子育て支援を始めて保育所の大きな変化が感じられることに、子育ては親だけでも保育所だけでも出来ないということがある。筆者の保育所でも、必要が感じられると医師、保健師、大学教員、児童相談所、行政、ボランティアなどとネットワークを組み、問題の解決を図ることが出来るようになった。

どの支援センターでも、多様な子育てニーズに応えられるような人的資源と能力を備えたいと考えている。これは保育所においても同様で、徐々に専門化する問題の難しさを、保育所だけで自己完結しようとせず、問題に応じて地域の資源を活用していくコーディネート力が保育を充実させていくと思われる。また、子育て支援センター間の連携が、大きな牽引力になって活動を活発化し、精神的な支えにも目標にもなっていることは周知の事実と言える。

⑤子育て支援のための学習の必要性

子育て支援に関わる関係者は、自分たちのさまざまな力量を向上させることに、大変意欲的である。日常の子育て支援が要求しているとも言えるが、親のニーズに真面目に応えるべく、相談の基本や技術、家族援助、親子遊びの数々、など現在求められていることに敏感に応えられる知識と技術を持ちたいと考えている。この意欲が新しい子育て支援をここまで広げ、地域に合った活動内容を開拓してく原動力となってきたと感じる。

5．まとめ

子育て支援に取り組むことによる以上のような保育所保育の変化には時間もかかったが、保育所や保育者の確かな力になってきた。そして今後も続くであろう。一方で、開設したばかりの支援センターは精一杯の状態である。先行した経験を省み、子育てのパートナーとなり、親を子育ての主人公とできる保育所保育をつくっていきたい。そして、保育所での子育て支援がそれぞれの親子に必要な当たり前のものとして定着する一助になることを願っている。

NII-Electronic Library Service